志茂田 景樹さん(71歳)

「ド派手な衣装と絵の具で描いた顔。舞台に上がった途端、大爆笑。これがボクのファッションの原点かもしれません」

「カゲキちゃ～ん」

1990年代、バラエティー番組などにこの人が登場すると、若い女性たちから嬌声が飛んだ。カラフルに染めた髪、フィット感のある独特のファッションで活躍し、子供たちにもその名は知られていた。志茂田景樹さんだ。本職は言わずもがな、作家である。近年は子供たちへの読み聞かせで全国を回っている。

中学時代の芝居でピエロ役

「コレは中学の2年生かな。文化祭で芝居をやったとき。ズボンは布で作ったブーツのようなもの。今か何かで芝居をやったときのワンカット。『ペニス』の商人」だったかなぁ。真ん中よりちょっと右の高い三角帽子をかぶったピエロ役がボク。緑色と赤のド派手なマントを羽織ってたと思います。ズボンは布で作ったブーツのようなもの。今で言えばレギンスに近い。"元祖レギンス"かもしれません、アハハ。この姿で、ボクが舞台に登場した途端、まだセリフも言ってないのに、生徒と教職員たちの間から爆笑が起こってね。絵の具と墨で眉毛やヒゲを描いた顔だし、よほど面白かったんでしょう。後年、バラエティー番組で注目されたボクのファッションの原点と言うべき所。それにしても先生のファッションはどうだ。髪は黄色、オレンジ、ピンク。ブルーのタンクトップにピンク色の短パン……。満71歳だけれど、妙に似合ってる。

「昭和28年か29年ですから懐かしいですね～。武蔵野市立第二中学校――。駅は武蔵境です。あのあたりは東京でも団地が早く建てられた地域で、1学年で10クラス以上あったはず。写真をよく見ると、1人、2人ほかのクラスの子がいます。たぶん2、3クラス合同のメンバーだったんでしょう。当時のボクは体が小さい方。クラスでも前の方だったし、ホラ、周りの女の子の方が背が大きい。どっちかといえばオクテで、幼い顔をしてたせいか女の子にからかわれたり、男の子とケンカしてかばってもらったり。どこかトロいところがあると思われていたのかもしれないね。ハハハ」

私の秘蔵写真

一枚かもしれませんね」

志茂田景樹さん、写真を片手にこう切り出した。落ち着いた語り口だ。話を聞いたのは麻布十番の商店街にある事務所。

寛斎のファッションショーでのモデルが転機

都立国立高校から中央大学法学部に進学。卒業後は弁護士事務所、セールス、保険調査員、探偵、塾講師など20余りの職を転々とする。

20代後半から小説を書き始め、36歳のときに小説現代新人賞、40歳のときに「黄色い牙」で直木賞を受賞した。当時はまだ、ごく普通の衣装だったが……。

「42歳のとき、山本寛斎さんのファッションショーに出たんです。あれがその後、ボクの衣装がガラッと変わる転機になりましたね。20人のモデルの大半は20代で、40代はボクだけ。そのとき思ったんです。『ファッションというのは自分が本当に装いたいモノを装えばいいんだ』ってね。

で、デザイナーズブランド系のファッションを身に着けるようになり、数年後にマリリン・モンローのプリントタイツを初めてはいた。

髪をブルーやコバルトに染めたのは47、48歳のころ。当時はすでに男性誌でもカラーマニキュアが取り上げられていましたね。ただ、茶髪はいたけど表参道を歩いても1人か2人程度。ボクはどうせやるなら派手派手に、とハラを決めて、グリーンや黄色、青に染めた。

派手なファッションと髪形でいろんなパーティーに出席していたら、週刊文春の目に留まって、10ページのグラビアを組むことに。これ以降、"カゲキファッション"として『元気が出るテレビ!!』など、バラエティー番組に出演することになったわけです」

被災地で読み聞かせ

90年代、カゲキファッションで一躍人気タレントとなったが、99年に再び転機が訪れる。

タレント活動をセーブし、夫人とともに「よい子に読み聞かせ隊」を結成。全国読み聞かせ行脚をスタートさせた。

「実は今回の地震で被害を受けた地域は、読み聞かせで何度も訪れています。福島県の飯舘村は2回、双葉町と大熊町は去年の11月に読書フォーラムで訪問したばかり。そのとき、原発に案内していただき、規模の大きさに驚いた。ヨーロッパの古城のようなぜいたくな造りの大熊町の図書館はどうなったことやら……。4月からは避難所の慰問を開始して、福島や釜石、大船渡も回りました。小学校4、5年生になると、もう原発事故の怖さをよく知っていますね。『自分たちの健康はどうなるんだろう』『いつになったら家で暮らせるのか』『また友達と会えるのか』――。あの日以来、子供たちはずっとさまざまな不安を抱えている。心のケアが心配ですね」